

リウマチ②

織間医院

院長 織間一郎先生

前号(3月1日号)に続き最近の治療の進歩について述べたいと思います。

最近の研究で、遺伝子の異常に外因性の要因が引き金となる免疫異常がリウマチの炎症の進展に大きな関わりがあることが分かり、従来より用いられてきた免疫抑制剤に加え、欧米では炎症を引き起こす各種の物質に対する後退が治療に用いられ始めています。

これらの免疫調整作用のある薬剤には感染に対する抵抗力の低下のほか、種々の副作用がありますので、炎症の程度を考慮において、専門医の指導により慎重になされるべきです。

また比較的安定期に用いられてきた非ステロイド系消炎鎮痛剤においても消化器系の副作用が問題となっていました。欧米では一昨年より飛躍的にその副作用の少ないものが実際に使用され始めていますし、わが国でも今年になりそのような副作用の少ない薬剤が数多く登場しました。

このように少しずつではありますが、原因究明に近づき、またそれにのっとった治療法の確立に近づいている事はこの病気に長い間悩まれてきた方たちに光を与えるものと思います。

しかし、この病気は非常に経過が長く、進行性であることが現状で、近い将来さらに有効な治療法が確立されても変形に関しては外科治療が必要となるケースが残される可能性は否めません。しかし、手術器具、手術法の改善もなされており、薬物療法と同様に今後の発展が期待されます。

専門医との十分な信頼関係に基づき、患者さん自身の病気への理解と主治医の慎重な管理のもとではじめて生活の質を落とすことなく、病気を安定した状態に保てるということが最も強調されることでしょう。

この病気と診断を受けてもあきらめずに専門医、かかりつけ医に相談していただきたいと思います。